

平成21年度第1回小金井市立はけの森美術館運営協議会議事録

- 開催日時 平成21年5月28日(木)午後6時～8時
- 開催場所 小金井市前原暫定集会施設2階 B会議室
- 委員 出席：鉄矢悦朗会長、宮村令子副会長、千村裕子委員、
淀井彩子委員、鈴木茂哉委員、豊岡弘敏委員代理教育委員
会指導室長補佐加納一好
- 事務局 出席：薩摩雅登学芸顧問
大野 玲学芸員、神津瑛子学芸員、
鈴木雅子文化推進係長、岩佐健一郎主事、
天野達彦事務担当

議事内容

【鉄矢会長】では、今から平成21年度第1回小金井市立はけの森美術館運営協議会を開催したいと思います。よろしくお願ひしたいと思います。

配付資料の確認をまずいたしたいと思います。

議事次第。それから、前回の議事録はありますか。それから、今年度の事業報告というもの。それから、横型の運営協議会資料というもの。それから、真ん中に帯の入っている横型の資料。それから、運営協議会事前資料2という資料です。それから、薩摩先生のほうから出ていますけれども、芸大美術館の資料。以上ですがよろしいですか。

では、次第にのっとりまして、1番、職員紹介ということで、美術館の館長が新しくかわりましたので、皆さん今お話ししていたかと思ひますけれども、よろしくお願ひします。

【鈴木委員】本日は、平成21年度第1回のはけの森美術館運営協議会ということで、お忙しい中をお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。

私はこの4月から、美術館長ということで異動で配属されました鈴木と申します。どうぞよろしくお願ひします。

ご存じのとおり、はけの森美術館は平成18年度に開館しまして、丸3年がたったわけでございますけれども、この間、皆様のご協力、ご尽力により

まして着実に成長してきているのではないかなと思ってございます。引き続き、より良い美術館の運営を目指していきたいと考えておりますので、活発なご議論をいただきまして、これからさらに親しまれる美術館ということで更なるご協力をいただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

【鉄矢会長】 よろしく申し上げます。それから、事務局の岩佐さん。

【事務局岩佐】 この4月に新入職員として入所いたしました。今まで食品メーカーで8年間、営業をしております、中途採用ということになります。まだまだ勉強不足なところが多々ありますけれども、ご指導、ご鞭撻いただきながら、少しずつ理解をしていけたらと思います。よろしく申し上げます。

【鉄矢会長】 よろしく申し上げます。新人に対して、新人の市の職員に対して何か諸先輩方からありますか。

【淀井委員】 若い方々が入られてよかったなと思います。期待しております。

【鉄矢会長】 諸先輩方は新しい方が入るとうれしいですね。

【淀井委員】 だって、ほんとうにそうじゃないでしょうか。いろいろな幅広い意見をね。

【千村委員】 それでまた新しい考え方も。

【鉄矢会長】 では、今年度事業報告を事務局からお願いいたします。

【大野学芸員】 学芸のほうから報告させていただきます。議事次第では、開催済み事業と書きましたけれども、開催と書くと展覧会だけのようですので、展覧会以外のこともやっていますので、資料では実施済み事業と書いております。

まず、今やっております開催中の所蔵作品展、「中村研一 春の特集～花～」ですけれども、これが今月末に終わります。こちらの内容などは、以前にもご報告しましたので、省きまして、前回の運営協議会が行われて以降に実施しました活動、事業についてご報告します。

まず、教育普及活動ですけれども、通常のとおり、毎週土曜日にミュージアムツアー、毎週日曜日にギャラリートークをしております。資料に参加人数と実施回数を書きましたけれども、少ない日ですと1名、2名の場合もありますし、多いときは10名単位の方が参加してくださることもあります。

毎回、2時ごろになったら始めるようにしています。

それから、3番、ワークショップです。

展覧会関連企画として、1つ目が「けんぼしゃんと遊ぼう」、「コラージュを楽しむ」。これは毎回やっておりますけれども、また実施いたしました。参考に、内訳で年齢等書いてあります。ここに書きましたように、3歳の小さいお子様から大人の方まで。あと、当日参加の3名も大人の方でした。大人の方が来て、あいているので当日参加されたりもしております。

毎回楽しめるワークショップになってきたかと思えます。

それから、二つ目です。次のページの、「花を描く」です。これも2回目です。奥様の富子夫人のご協力でモチーフを再現しまして、講師の先生をお招きして花をかくワークショップをしました。こちらは中高年の方が多かったんですけども、小さい方だと小学校4年生の女の子も参加してくださいました。

それから、4番、イベントとして、「寺子屋・はけ美～小さな美術館からの声パートⅡ」ということで、皆様のほうに事前にお配りしましたシンポジウムの報告書を使いまして、それと当日のビデオを見ながらお話しさせていただきました。残念ながら、参加は3名と少なく、難しいと思ったんですけども、シンポジウムについては今後も何らかの形で継承してやっていきたい、今回の経験を生かしてつなげていきたいと思っています。

それから、今、ちょうど始まりました展覧会とは別立ての教育普及事業。これは今年度から初めての、展覧会とは関係のない別立ての普及事業です。こちらは担当している神津からご説明したいと思えます。

【神津学芸員】 実際にワークショップを始めるのは来月からですが、説明会という顔合わせの形で先週の土曜日にスタートしました。一番下が7歳、上は60代で、実際の現実社会と同じようにばらばらで、いろいろな演劇の遊びを通した自己発見につながるワークショップという形で企画しています。こちらは前回のときにご説明したと思うんですが、発表会が27日の夜にありますので、その発表会のご案内を委員の方々に送らせていただきたいと思います。もしお時間がありましたらのぞいてみてください。

【大野学芸員】 簡単ですが、以上が実施済みの事業の報告です。続けてよろしいですか。

【鉄矢会長】 はい。お願いします。ちょっと待ってください。6月27日

の何時からですか。

【神津学芸員】 18時半ぐらいからを予定しています。変わるかもしれませんが、大体そのくらいです。

【鉄矢会長】 場所はどちらですか。

【神津学芸員】 はけの森美術館の展示室です。

【鉄矢会長】 展示室でやるんですか。

【神津学芸員】 はい。空っぽの展示室で体を動かしていろいろ作っていくというワークショップです。

【鉄矢会長】 定員が20名というのは、見る人数の定員ですか。

【神津学芸員】 見る人数制限は別に決めていません。大体40名までなら、館のいすで賄えるので、それくらい。お母さん、お父さんを連れてきてくれるとかを考えています。

【淀井委員】 いっぱいになっちゃうんじゃない。

【神津学芸員】 きれいな展示室ですし、床に座って見ても良いかと思っています。

【鉄矢会長】 参加者が18名で。

【神津学芸員】 はい。そうです。各自、だれかを呼んできたり。小さい子ばかりではないので。

【鉄矢会長】 僕が思ったのは、例えば20日の練習日とかに取材をかけたときに、うまく載るとすぐ見てみたいなど。とても美術館がこんなことをやっているのはおもしろい企画かなと思ったけれども、やったは良いものの、入れないという事態が起こりそうな気が今したのでね。

【神津学芸員】 発表会といっても、きちんとお芝居をするわけではなくて、切り抜いた一場面だとか、自分たちでやっている成果を発表する。

【鉄矢会長】 でも、絵面としてはすごく、20日のところで取材に入ってもらいたいんだけど、来られたときによいか悪いかがわからないので、そうしたら、27日に来てもらって、取材をかけてもらって、記録として取材が入るほうがいいのかなど。

【神津学芸員】 ちょっと検討します。

【鉄矢会長】 ちょっと危険なような気がしたので。

【千村委員】 床で見ているのもいいとは思いますが。そんなにいっぱい来てくださることを想定していますか。

【大野学芸員】 そんないっぱい来てくださることを想定していなかったものなので。

【鉄矢会長】 続けてください。

【大野学芸員】 今年度実施予定のものがその後になります。では、田中絹代展のほうは、担当が神津ですので、神津からご報告します。

【神津学芸員】 チラシがぎりぎり間に合わなかったんですが。こちらの資料を回していただくと、雰囲気とかもわかると思うんです。見本ですので、裏表くっついていますが、今回、ポスターとちらしを兼ねたデザインのものということで、四つ折りにしてチラシの紹介にする。そちらがポスター一面で、裏がチラシ面になります。情報量も多いということでこういった形にしたんですが。

【鉄矢会長】 中央線の車内に吊ってみたいですね。

【神津学芸員】 はい。ちょうどそのサイズです。企画に関しては以前もお伝えしたと思うので、また何か別にご質問があればと思います。チケットも凝ったかわいらしいものができているので、ぜひ。

【鉄矢会長】 これも正木先生のところの。

【大野学芸員】 そうです。デザインは東京学芸大学のデザイン研究室にお願いしています。

【鉄矢会長】 知らぬ間にこんなのができていますね。

【大野学芸員】 間もなく刷り上がって納品されますので、委員の皆様の方にもご案内しますが、内覧会が7月10日にありますので、ぜひいらしてください。

【大野学芸員】 イベントがほぼ毎週のように入ります。映画上映会ですとか、あと、地図が載っていましたが、あそこを歩く遠足の会ですとか、毎週のようにイベントが入ります。

【神津学芸員】 毎週土曜日に必ずイベントがある企画になります。

【淀井委員】 年齢高そうですね。

【神津学芸員】 はい。

【淀井委員】 その辺のことは非常に興味があると思うけど。

【宮村委員】 結構チラシが良いですね。

【淀井委員】 チラシはチャームングですね。

【宮村委員】 行きたくなるような感じですね。

【大野学芸員】 あと、チケットもいつもとサイズを変えて、しおりになるようなものを。それが終わりましたら、9月12日から、所蔵作品展Ⅲが始まるんですが、次のガラス絵展との関係もありまして、この期間がいつもの所蔵作品展よりも短くなります。通常は大体3か月ほどやっているんですが、ここは1か月半ほどしかありません。通常よりも短いということもありまして、何かおもしろい新しい試みができればと考えたのですが、教育普及に重点を置いて活動する美術館であるということを考えて、常設のワークショップエリアなどを展示室の中に設置して、絵を見るだけではなくて、来た方が遊べるような展覧会がしたいと思ひまして、今、「アトリエおもちゃ箱！」という題を仮に作って企画を立てているところです。その下に書きましたように、展示室内にアトリエおもちゃ箱スペースを作って、そこで自由に遊んでもらえるような形にして、例えば塗り絵ですとか、中村研一の作品を塗り絵にし直したものですとか、葉っぱパズルというのは、葉を画面一面に緑の葉を描いたような作品が幾つかあるので、それを使って遊べるようなものですとか、その他もろもろ考えております。そのような展覧会をする予定です。

その次ですけれども、浜松市美術館ガラス絵展、これも何度もご説明しましたけれども、特にお伝えしたいのは、小学校4年生の鑑賞教育をここでしっかりしたい。今回が初めてかとは思いますが、全市立小学校の図工の先生と打合せをし、一緒に今、練っているところです。それが終わりましたら、また、例年どおり、年度をまたぐ形で、年も変わりますので、2010年所蔵作品展Ⅰとして春の展覧会をいたします。

展覧会についてはここまでなんです。次は、その他の事業で、今年度予定しているものです。展覧会とは別立ての教育普及事業Ⅱということで、もう1つできる枠が残っています。これはまだ練り上げ中なんですけれども、キーワードとして、はげの森美術館ですから、水ですとか、水でも特に流れるとか、わくとか、たまる、あと、森の中にある美術館なので、緑ですとか、そういうものを音でつなげて、水について音を通して思えるような音楽ワークショップをしようと考えています。

講師の安達正芳先生といま一緒に企画を作っている途中です。何とか秋ぐらいには、季節のいいときに実施したいと思っております。

最後ですが、これが何度かお話ししています、作品台帳の作成とそのデータベース化で今年も進めていきます。

このデータベース化というのは、その後の所蔵品目録発行の準備にもなりますので、少しずつでも進めていきたいと思っているんですが、特に美術館に端末（パソコン）が2台増設されるということで、スピードアップできるのではないかと考えています。データ入力をする臨時の職員の予算もとれましたし、進めていきたいと思っています。以上です。

【鉄矢会長】 前回のときに、今年度の事業は大体こんなことをやるというものをお館からいただいていたので、大きく違うところはないと思います。最後のところは新しく、もう少し工夫していきたいという教育普及事業Ⅱというのが加わっているような形ですけれども、ここまでで何かご質問等ありますか。

では、（2）開催予定事業も終わったんですね。

【大野学芸員】 はい。

【鉄矢会長】 来年度いよいよ前回、打ち合わせをしつつ、協議会をやろうかということで、ずっとやっていたのが来年度の予算をそろそろ立てる時期なので、来年度どんなことを考えているのかというのを我々も聞いておいたほうがいだろうということで、今この時期に運営協議会を設定しておりますので、来年度、美術館としてどういうことを重点的に事業としてやっていくかということを知っておいていただきたいんです。

3番目、では、来年度の重点事業（案）というところですね。

【大野学芸員】 はい。事前に皆様にお配りしました事前資料（2）になります。こちらは事前にご一読いただいたかと思えますけれども、特に22年度の重点事業として学芸のほうで考えていますのは、開館5周年に当たりますので特別企画展をしたい。開館5周年の特別企画展であれば、それは中村研一のものをもう一度、しっかりするべきだろうと考えております。ただ、難しいのは、予算の問題等があります。そのために、前回もご報告しましたけれども、枠予算の問題がありますので、何かを減らさなければいけないんじゃないか。どこかで工夫しなければいけないのではないかと考えているんですが、今考えていますのは、そのために展覧会を1本減らして、所蔵展が1本、企画展を2本という形にして、そのかわり閉館時期が長くなるので、また今回のようなワークショップをしましたり、作品台帳の作成とを集中的にやる時間が必要ですので、そちらに時間を割り振るなど工夫しようと考えています。ちょっと省略しましたけれども、ご質問がありましたら、よろし

くお願いします。

【鉄矢会長】 展覧会が通常、所蔵展2本、企画展が2本だったものを企画展を少し大きくして5周年にするので、所蔵展のほうを1本減らすというふうに工夫をかけるという対策をかけながら、5周年の特別企画展を力を込めていこうという美術館からの提案です。ご意見をお願いいたします。

【淀井委員】 いいと思います。

【鉄矢会長】 いいと思いますか。そういう意見をください。

【千村委員】 何か、開館していないときの重要な意味みたいなものがひしひしと伝わってきまして、実際なさっている人達の努力の結果がでているのかなと思います。

【鉄矢会長】 私は1点だけ、重点事業ということでやってきた教育普及関係のものが1回総ざらいできるような、見えるものが1枚でもできるというなど。A4でもいいけれども、5周年のときに、中村研一美術館だよといって中村研一を第1にすれば、教育普及事業も大事だよと言っていたので、教育普及ももしかしたら同じだよというのを見せて、二本立てのようなものとか、それから、小さな美術館のこちらの方もスタートしているのか、どういうまとめ方をするのかはあれなんですけど、今はこの重点だと、ほんとうに中村研一記念美術館で今後もずっと中村研一記念だけがキューとなっちゃうんじゃないかと、それはそれで大事なんですけど、ほかにも、せっかく美術館が頑張っていて、さっき田中絹代のあたりのいい空気、若い人たちが一生懸命新しい美術館を作っていくといういい空気の部分がもう少し見えるようにできると。

【淀井委員】 目黒美術館とかありますね。あそこが教育普及活動の結果を一冊にまとめたんですね。カラーで。とてもすばらしいですね、あのくらいのレベルで出来るといいんですけど。今後まとめて行っていただけるといいですね。

【鉄矢会長】 書籍みたいな。

【淀井委員】 まとめたものがあると良いですね。

【鉄矢会長】 美術館も飛び出ているところがいろいろあるから。

【淀井委員】 とても活性化をされていますね。元気がよくなっていいなと思っています。

【鉄矢会長】 すごいいい評価ですね。いい評価ですね。(笑)

【淀井委員】 私が休んでいる間、何か良くなっていて驚いたんですけど。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。鈴木委員から他にご意見は。

【鈴木委員】 問題点ということで、厳しい予算で、確かに市財政が厳しい状況でございますので、限られた予算の中でいかに工夫して、いい企画を実施するということは重要になっているとは思いますが、5周年を迎えるに当たって、そういう特別記念展をしたいというご意向があります。それに関しては最初の5周年の節目になりますので、ある程度お金をかけて盛り上げるといいますか、市民の方にも再度、中村研一という人物を周知をするという意味では非常に意味があることなのかなと思います。

【千村委員】 これの中に美術館報を行く行くは出していきたいという気持ちが書かれていましたね。今のような教育の普及活動みたいなものを積み上げてきたものがそういう館報の中に少しずつ発表していったり、あるいは前回、みんなで話をしたように、いろいろ予算がほかの館とどのくらい違って、どんな苦勞をしているかみたいな具体的なのもそういうところに込められて、館報の中に入れていったら、もっと市民が親しみを持って美術館の運営や美術館のいろいろな原則も市民に理解が得られるのではないかと思います。

【鉄矢会長】 来年の重点事業に関して、今言っておくともう少し来年の事業の予算が増えるかと、記憶に残させるというのも出たんですけども、もしほかにございましたら。

【千村委員】 その美術館報というのは、なかなかいいし、期待もできるんですが、それを作る側のことを考えると、追われるような印刷物の発行というのは、人に記事を頼んでも締め切りに間に合うだろうかとか、いろいろあって、こっちからそういうものはあったほうがいいなと軽々に言えないなということも感じますけれど、少しどんな形になるか、最初はあまり無理しない形の方が良いのかなと思います。

【鉄矢会長】 私の希望ですけども、そろそろ野川のあたりに出ていくようなことがあるとうれしいなと。できるかどうかわからない。安全管理の問題もあるでしょうし、教育普及で野川があるんだねなんてこともあったので、そこに出れるようなものも少し検討していただけるとありがたいと思います。

【淀井委員】 関係があるかどうかちょっとわからないんですけど、三鷹に

荒川修作のヘレンケラーのためにという建物がありますね。目黒の学芸員の方とちょうど話す機会があったもので、いろんな話が出たんですけど、目黒からわざわざ子どもたちを連れてあそこまで来るんだそうです。電車に乗ってバスに乗って、体験させるらしいんですけど、そのことで言ったら、ここは近いのでちょっと遠足みたいにそういうことをこっちの美術館でも、できるかなと話を聞きながら思ったんです。あさって行ってきますので下見してきます。

【鉄矢会長】 そうですか、前を通るのですが、あまり好きじゃない。

【淀井委員】 いや。わからないですよ、行って見ないと。

【鉄矢会長】 個人的な意見ですが、あれはあれで。

【淀井委員】 そう。私も外から見て変なものだと思っているけど、わからないじゃないですか。

【鉄矢会長】 そうですね。

【淀井委員】 なかなかおもしろいのかもしれない。

【鉄矢会長】 そう言われると連携する場所はいっぱいあるんですね。国立天文台なんかも、実は開いて一生懸命そういう動きをしようとしているけど、うまくやると負担なくできる。

【淀井委員】 私たち、頭がかたいじゃない。何か、見て不愉快な建物だとか、そういう偏見で見ますのでちょっとわからないでしょう。もしかしたら、おもしろいのかもしれない。

【鉄矢会長】 取捨選択はされると思いますから、美術館が全部できるわけじゃないので。ただ、せっかく運営協議会でこんなことを前言っていたのはどうなっているんだろうなとか。

【淀井委員】 ボランティアとかいうのはどういうふうに活用したんですか。いるんでしょうか。ボランティアの、美術館に。

【大野学芸員】 ボランティアの組織みたいなものはないです。企画に合わせて、内容に合わせて例えば近隣の大学ですとか、知っている方とかにお願いして募集しているという形です。

【淀井委員】 どうなんでしょうね。

【大野学芸員】 そろそろ……。

【淀井委員】 期待するのも何ですが、理解があって、美術館に協力したいという何かやっている方々というのがいるといいですね。

【鉄矢会長】 以前、ここの一番初期段階の話のときに、農工大の繊維博物館のシンカイ先生のお話を聞いたときに、あそこは博物館があって、ボランティアがいて、ちゃんとボランティアが何年かやって卒業するシステムがあるんだそうです。その卒業するシステムがすごくいいんだと言っていましたね。ボランティアがずっと学芸員よりよく知っているようになっちゃうのは怖いそうです。だから、上手なシステムがほんとうにできるといいだろうと僕も思います。

【千村委員】 私の妹は新潟市立美術館のボランティアというのか、もう何か要請みたいなのを受けてボランティアしているんですけど、それは美術館のグッズを売店で売ったり、そういうのもすごく上手に、よく売りつけると言ったほうがいいみたいな感じ、それとか、解説みたいなのもちゃんと勉強して、ちょっとお手伝いしたりとか、それから、いいのは、作品を借りてきたとき、返しに行くとき、一緒にくっついて行って、国内という場合もあるんですけど、たまにイタリアとかについていたり、自分たち自費についていたりとか、もうすっかり美術館のお手伝い一員というボランティアで定着して、職業のように喜んでやっていますけど、そんなようなシステムもあります。

【千村委員】 ボランティアが育つといいなと思うんですけど。

【鉄矢会長】 では、3番目の来年度の重点事業枠の議題を終え、次の継続検討事項についてというものに入りたいと思います。

継続検討事項及び美術館継続検討課題についてという、この事例資料1のほうなんですけれども、これは事務局のほうと、私のほうも、それから薩摩先生のほうも加えながら、館長も新しくなるということで、もう1回、しっかり今までやってきた運営協議会の中でずっと積み残しているようなものがあるだろうということで、それをもう1回まとめ直してもらったものが、しゃべり口調から違う口調になっていますので、穏やかでないように聞こえますけれども、語調は穏やかですから、そういう意味で読んで進めていきたいと思います。

こちら側、私のほうから1枚1枚やっていったほうがよろしいですか。

【大野学芸員】 お任せします。

【鉄矢会長】 では、資料に基づいて、私のほうから。この資料はAとBに分かれています。A、今後も継続して協議することが確認されている事項、

B、美術館事務局側で検討するよう指示された課題というものを過去の全10回分から抜き出してまとめております。

それから、先ほど言ったように、口語体の議事録ではないので、とてもストレートな表現で書いてあります。

では、確認も含めて、ちょっと時間がかかるとは思いますけれども、一つ一つ行きたいと思います。1ページ目、1回目で、資料作成の経緯というところで、運営協議会の役割、あり方について。運営協議会と美術館がどう歯車を組んでいくか、どういうふうに美術館を支援したり、設置したりするのか、そのタイミングを作っていたいただきたいということです。

それから、運営のあり方、事業の内容、経営についてどうするかという諮問に対して答申を出すところ。したがって、原案など事前に情報や資料をもらい用意しなければいけない。事務局は事前の準備をする。事前にできるものを事前に配るような形で、今回も配っていただいたのはそのためです。

20年度の淀井先生がいらっしゃらなかったときに、これは4回の予算があるけれども、会議、どういう会議にするんだらう。一番いいのだからかということで、私のほうで、1回目は予算を決める前の計画ですね。計画の段階でどんなことを考えているのか。重点事業案という格好で出てきています。その結果で次年度の予算などが決められて、決めて報告を2回目にしてもらう。最後の年度報告が3回目になるのか、4回目と、私は3回目かなと思ったんですけど、あとは、今、5月28日になると年度初めではないですね。そうすると、年度初めの1回目は、美術館で展示を見ながら、学芸員の意気込みとか、館長の意気込みを作っていくのも一つの会議のあり方かなと思って、そういう方法もあるのではないかということ。

そのときに出たのが、過去3年の議論をして積み残しになっているものを整理していきたいという話が出てきた。クリアする課題、クリアできないもの、翌年にクリアしようとかいうものが見えてくる内容を最初に、あとは例年どおりということで、最終的には、一番最後のところ、6月前半に1回、8月、それから9月すぐに2回目、12月後半に3回目、3月の初め、年度末として4回目という計画で運営協議会を開催していこうと。まずは、このペースで仮に決めて進めてみて、今年度うまく行くか、話している内容と運営のタイミングが合えばこのまま継続できますし、これが決まってこのままというわけじゃなくて、それでまずいところがあったら修正していきましょ

うということ。

ここまでで質問はよろしいですか。

次です。A、今後も継続して協議することが確認されている事項。2 ページ目の下のほうからです。学芸員体制について、これは一番ずっと問題に上がっている。学芸員が非常勤職員 2 名では、業務の責任や方向、勉強の仕方などがかなり重要なのに大変難しい状況にある。それから、研究するという時間がないとか、美術館の信用が落ちてしまうのを危惧する。それから、実際問題、提言に沿って企画展を実施するということとか、残業がかなりきつい状況で、やっていたとき、18 年度は同じようにできるかわからないという学芸員からの声も出ました。

学芸顧問の薩摩先生のほうからも、企画展の作品借用は今、薩摩先生の信用でやっていただいているような格好になっている。

それから、学芸員の熱意に寄りかかっている感じである。美術館を作った以上、体制づくりが必要である。それから、運営委員会としても、常勤になってほしいという方向で進めていこう、押していこう。市の文化レベルに直結する。継続的な市民サービスのためにもお願いしたい。

私のほうも、その後で学芸員と薩摩先生のほうに少し甘えた格好に見えるんじゃないですか。何とか市長に報告していただきたいというところで、3 人体制が何とか進められる格好に行きそうだったときに、19 年度で学芸員の方が 1 人、病休になりまして、3 人体制ができてしまいました。覚えていらっしゃいますか。3 人体制ができたので、館長がもう少し様子を見ましよう。ちょっと市長に報告するのは今じゃないという形だったので、来年から 2 名になると小柳館長から説明があって、その辺で私がちょっと食ってかかったような格好になりまして、2 名で要求するのかということはずっと言っていたんですけども、このときは館長としての意見じゃなくて、市の今までの考え方を述べていただいた格好だったと思います。

下から 1、2、3、4 です。協議会としては学芸員 3 名体制で、2 名でも要求しないと思うというか、しなければいけないと思うんです。2 名学芸員が常勤になれば、1 名非常勤という格好でいいと思う。こういうことでやったらどうかと言ったら、どうもスタート時点のものが基本ということは、非常勤 2 名が基本だというふうに、このときも答えをしています。

一番下で、常勤 1 人いれましょうまくいくというふうに薩摩先生のほうからも

コメントをいただきながら、学芸員に関してはずっと淀井先生からも、次も出ています。3人が2人とはどういう事情なのかと。2名に戻すという約束はだれとの約束だったかという次ので、私どもと常勤にするという約束もないです、それは。ただ、一番最初に作った提言のほうからずっと、常勤にしたほうがいいよというのを市長のほうにちゃんと上げてほしいという希望を出しているわけです。小柳館長も、十分認識しているというところもあるので、ただ、こういう格好で、最後のところもとても穏やかじゃないような、4ページの一番下のなんかも、淀井先生のしっかりした意見を読み上げませんけれども、あります。

ということで、5ページのところに行くところとちょっと変わってしまいますので、4ページのここで一応学芸員の体制についてのところが、学芸員の体制についてなんですけれども、今これをずっと読んでいただいて、私のほうが読み取って、最後まで読んでいくと、どこまでも譲っていくのかというところですけども、3ページの一筆最後の薩摩先生のコメントは、端的に折り合いがとれるのはここじゃないかというところを言っているのかなと思うんです。ほんとうなら2名常勤がいてというのがあるんですけども、予算厳しい中、言うなら、しばらくの体制でもいいから1人でもというのがなればいいのかと思います。ただ、我々は、常勤が必要である、学芸員は2名以上必要であるということは協議会の中で合意をしてきた意見ということで確認してよろしいでしょうか。

【薩摩学芸顧問】　しっかりした常勤が1人いれぱうまく回るというのは、これだけだと誤解があって、とにかく常勤が1人いて、非常勤が1名ぐらいは必要という意味です。ほんとうに1人では何もできないので。ただ、発言ついでに申せば、これはどこかで解決していかないといけないのは、非常勤というのは任期がありますね。そうすると、私がこういうふうに言っているのかわかりませんが、今、この2人は多分どこの美術館に持っていても十分通用するだけの非常にすごい能力を持った2人なんです。ただ、いずれ任期が来て、ご苦労さま、さようならと言って、また新しい人をどこから探してくるのかというのは、これは余りにもいろいろな意味で支障があり過ぎます。もちろんこの2人がもっといいところを見つけてくれて、栄転していただければ、それはどんどん行っていただきたいんですが、これだけ大きな仕事を何年間かやって、それでご苦労さまでしたというわけに

は多分いかななくなってくる。その辺は少し柔軟にというか、交流センターもできますし、いろいろありますので、場合によったら常勤にして、この館だけの面倒を見るのではなくて、ほかにある、ギャラリー的なものの面倒を見る、市の全体の美術・学芸関係を対応するとか、少し仕事を拡大してでもいいですから、何らかの措置をとっていかないと、常に任期付きの非常勤だけで回せということは極めて難しい状況に必ずなってくると思います。ですから、そういう点では、ある意味でタイムリミットが設定されているものですので、解決を図っていかねばいけないと思います。

【鉄矢会長】 今、お話が出たように、最低常勤が1人、学芸員に対しては2名以上ということをやっていただきたい。それから、早急な問題である、人材流出とか、税金で育てたり、また自分たちが勉強していただいているのもあるけれども、そういったノウハウというものが簡単に終わってしまうのはもったいない。そういうことを運営協議会の意見としてまとめたとしてよろしいでしょうか。

では、これを美術館のほうに上げて、美術館のほうで館長を通して市長に上がるということになるのかどうかは美術館の判断にお任せする。

【千村委員】 運営委員として最重点要求というか、要望というかというふうに思いますね。それは今、先生がおっしゃったように、せっかく築いてこられた学芸員の非常勤の方が、非常勤というか、そういう常勤でない方がかわるということは、すごく重大な意味を持っていると思うのです。

【鉄矢会長】 変な言い方ですけども、学芸員本人は、そんなことはすごく言いづらい話ですね。でも、運営協議会とか、ほかの管理職のほうから、これをすべきであるとか、そういうふうに上げていかないと進まないような問題だと思います。

【千村委員】 こういうものを読んでみましても、すごくだんだんと充実してきて、アイデアのある運営協議会と学芸員たちに任されてきて、だんだんはけの森美術館も発展して、内容が濃いものになっていると感じているので、しっかりとして嫌われないように、ここにいてほしいな、ここにしっかり引きとめておけるようにしてほしいなと思いますね。(笑) だって、ほんとうにこれらの印刷物を私は感心しました。だんだんとすごく中身の濃いすばらしいものを。それをこの運営委員だけというか、一部の人だけが知って、だからこそ、これを発信する格好みたいなものが重要な意味を持つてくるなど

いうことを感じたわけですがけれども、とても大事なところだと思います。

【鉄矢会長】 5ページに次の、今の空気をよく反映したことなんですけれども、運営協議会の委員構成について。美術館に物を申すべき協議会委員に館長が入っているのは混乱する。先ほど一番最初にも意見を言っていたのは、館長の立場はすごく微妙な表現だったと。申しわけないなと思いつつ、でも、しゃべってみていただくとすごく立場がよくわかると思いつつ、こういう格好になったものです。開館して3年たって、不都合があるならば条例を見直す方向で検討すべきではということで、構成がおかしいと。でも、条例を直すと議会にかけなければならない。でも、議会にかけなければ直らないからやめておこうじゃなくて、かけましょうという格好で、とにかくこの体制は混乱しない体制じゃないと、せっかくいい美術館に育ってきて、運営協議会のほうもいろいろコメントをしたり、言ったときに、両方いい立場でいい話し合いをできるようにするためにも、館長は運営協議会の委員ではない方向に条例の改正をしていただきたいと思いますと思っている次第です。

それを今、委員になっている館長にまた言うのも変な話、おかしいので、運営協議会委員の館長は別で、美術館側ということで分けたほうが良いと思う方は挙手をしてください。

(賛成者挙手)

【鉄矢会長】 全員一致で。

【千村委員】 去年までは違和感がありましたから、どういうふうに行ったものか、非常にありました。

【鉄矢会長】 はい。これは満場一致といたします。

次です。基本方針の策定について、5ページの下のほうです。今、美術館の運営のベースになっているのが提言というものです。これは実は都合のよいように使われる危惧があつて、いや、これはあくまで提言ですからという場合と、都合のいいときは提言に載っていますからという両方のものがあります。それこそ来年5年を迎える段階で、どういう指針とか、学芸員の方が動くときに基本方針みたいなものを持っていないというのも課題であると聞いていますので、ぜひ基本方針を策定していきたい。基本方針を策定するに当たる段取り等が市の段取りでやらなきゃいけないと思うんですが、基本方針策定準備委員会を経てから、それから策定委員会を開いて、それから策定するのか。その辺は、手法のほうは美術館のほうにお任せするとして、提

言から美術館の基本方針の策定に動くということをお願いをしたいと、運営協議会として思うということ意見をまとめてよろしいですか。

【薩摩学芸顧問】 提言を策定する2つの委員会の委員長をやった者として申しますと、ああいう提言というのは、私もほかの委員会あたりでもやっていますけれども、今、鉄矢委員長が言われたように、ある意味でいろいろなふうに解釈できるようなものにならざるを得ない部分があります。ただ、あの提言の中には常勤のということがはっきりと書いてあるわけで、ですから、そういうときには提言にすぎないという言い方をされてしまうのかもしれませんが、ただ、この提言を出すときに一番難しかったのは、あまり前例がないような美術館だったので、なかなかどうしても公務員的な仕事というのはある程度横並び的というか、前例を探すようなところがあるけれども、それがちょっとなかったということもあって、ああいう提言になっているんですが、3年間やってきて、いろいろなものが見えてきていますので、それを踏まえて今年か来年か、どこかで1回、私はこの運営委員会でもできると思いますが、決めていくべきかなとは思っています。幾つか非常にいろいろなおもしろいことがもう出てきていますので、それはどこかでぜひやっていただきたいなと思います。現実に即した方針を定めるべきだと思います。

【鉄矢会長】 3年間、4年間、5周年を迎えるに当たって重ねてきたものがあって、兆しも見えて、間違いのない兆しが見えているから、僕らは明るい協議会をしていただけるんだと思うんです。ぜひこの明るい兆しをしっかりと明文化して基本方針とできればと思っております。美術館のほうにお任せして進め方を検討していただきたいと思えます。

6ページ目に入ります。美術館事務局側で検討をするよう指示された課題。協議会資料について。先ほど千村委員から、よくできていますという話があって、それは我々も一緒になって協力して、多分こうやったらいい、ああやったらいいと話し合っていけばいいと思います。ここに関しては、1番上から行くと、どの段階で何をチェックするか考える資料が要するというのは、運営協議会の開催タイミングも今回、一応第1案という格好でスタート。第1案というか、一応固定化できそうな格好なので、それでチェックをしてできればいいと思っています。

それから、はげの森美術館としての調査カードを必要としていますけれど

も、開館前の準備をやっていなかったということで、これを近い、重点事項。重点に入っていましたね。今年度データベース化ですね。データベース化の話も入っております。今、進めようとしているところです。今年度の予算がついているところで。

それから、企画やイベントが回数、焦らず、地道に同じことを繰り返す。土曜日のイベントとか、そういうので粘り強いことをやっていると思っています。私は非常に高く評価しています。

それから、小さな個性的な美術館という着眼点、これに対しても、こういったシンポジウム。こういったと言った公開シンポジウムの記録というようなものが出ていますし、これのメディアのほうでも『アイダ』という、これは何のことなんでしょう。

【大野学芸員】 『アイダ』という雑誌です。

【鉄矢会長】 というところでも、一番小さいことはいいことだ、個人美術館をめぐるということで、少し下のほうにやっとスタートしたということで、これからも期待したいという声も出ています。そんなこともあって、これも進んでいると、スタートしてもう進み始めているという格好でいいなど。

それから、薩摩先生か何か、学芸員にはできるだけ自由なことで、いろいろなことをやってもらいたいというのも、先ほど淀井先生の評価でもあったように、元気になっているように見えるというのは、多分それが素直を評価だと僕も思っています。

ただ、一方で、美術館単体で考えるものではないということを、私が最後に、下から2番目で言っていますけれども、この点は実は非常勤の話というのも単年度契約の非常勤なのか、常勤なのかとか、いろいろありますけれども、常勤がいるともう少し安心して長い企画もできるのかもしれないですね。

千村委員のほうからも、中学生、高校生にもっと来てほしい。その状況の報告が欲しいと。これは今後、期待したいところですね。高校生は特にどの美術館も多分難しいと言っていますし、ここだけではなくて、いろいろなところが難しいことだと思います。

【淀井委員】 小学生が一番大事じゃないですかね。中学生は受験が近いから。

【鉄矢会長】 ですから、協議会資料については、事業計画と報告に関してはかなり工夫がなされてきているという評価が僕はかなりできてきている

と思います。今後も継続して工夫を重ねていただきたいと思います。

次が入館者数及び販売売り上げデータということで、活動の目的と、これはどう入館者数に反映したほうがいいのか、これはまだまだ数が足りないのと、時々そういうのがあるのというのはだんだん重なるものだと思いますので、そんなに急いですぐデータが出るわけではないけれども、そういう視点で自分たちのやった工夫がどう入館者数に影響するのかというのが見えてくると良いと思います。特に子供にどんな企画をやってどんな効果が出たかとかというのが我々の美術館の教育普及部門の工夫なので、教育普及部門の工夫を社会に見えるようにしなければいけないのはこの辺だと思うんです。

【大野学芸員】 ちょっとよろしいですか。先ほどご報告は忘れたんですけども、横長のデータですけれども、こちらは今回、前回の運営協議会から日がたっていませんので、詳しく説明はと思ったんですが、一応データだけは出しました。特に2枚目のほうですが、四角く囲ってコメントしてあるところですが、上の段。5月16日に、けんぼしゃん、中村研一の誕生日記念ということで無料開放日を設定しました。大人125名、子供13名、幼児4名の入館がありました。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。こういう工夫もしながら、開館人数がちょっと増えるとしても、そうやって知っている人が増えると、すごく重要なことだと。ちゃんと宮村委員のおっしゃっていることがこのように反映される。それから、もう反映されていますけれども、団体の子供の無料に踏み切った。そういうところも徐々に工夫して、美術館が教育普及活動を少し興味を持ってやっているということが繰り返し出るように、工夫して、数字のカウンターの仕方をやっていращやるので、今後も協議会出た資料の中で我々も、もう少しこうやったら見えるようになるよとかいう工夫の部分は指摘をしていきましょう。ともに工夫して、ほかの市民の方々がよりわかりやすいように「見える化」をしないといけないものだと思いますし、こちらのほうに関しても工夫がなされてきていると僕は評価をしていますけれども、皆様よろしいでしょうか。

よろしいようなので、協議会資料についての年度予算。年度予算のほうで淀井委員が指摘している1番の調査研究費がないというのは、相変わらず多分調査研究費がついていないんですね、項目としては。

【大野学芸員】 特別旅費の中に調査研究のための旅費というものがつきま

した。

【鉄矢会長】 調査研究のための旅費だけ。

【大野学芸員】 旅費がつかます。

【鉄矢会長】 旅費がついたそうです。努力が少しできていますが、もうちょっとですね。

【天野事務担当】 これは予算要求をする段階で、昨年度から調査研究費をたっぷりはありませんけれども、徐々についてきています。そういう中で調査研究の結果、例えば図録作成だとか、段階的に必要な予算は要求していくということで財政のほうに話をしておりますので、最初の段階では調査のための旅費というようなことで、財政のほうでは少なくとも認識していると私は考えています。

【鉄矢会長】 ぜひ調査要求を出していった学芸員がいざいなくなっちゃうと、だれがそういうものを書くんだろうということになっちゃいますし、そういう齟齬のないようにしたいものですね。

前年には調査研究予算がない。同じことを言っていますね。その時間がない。自腹を切って措置する現実、書いてありますね。マット加工費の委託が少し認められる。下から2番目は長い。教育普及部門として独立してあらわすほうがいいだろうということですね。これも前、そういう格好でしていますね。8ページに入って、予算に反映した上に常に記録しないといけない。予算が獲得の努力が学芸員や館長の交替でわからなくなっただけではいけない。議会に説明もできなくなってしまう。美術館のやってきた努力や改善点を顕在化し、市民にわかりやすく説明できることが大切だというのは多分、千村委員の言っている館報みたいな形の美術館報みたいな話で、もっとやっている工夫が見えるようにしていきたいという話ですね。

ただ、先ほど千村委員もおっしゃったように、発信するには労がすごいよという話です。

美術館の協議が全体にまだまだ足りない。とれないという状況があるので、そういうのが足りないというのをどういうふうの上に伝えていくかというのがまだまだ研究の余地があると、こういうものを継続して工夫していただきたいと思っております。

継続して工夫していただきたいところについてはこれで。

広報について。広報についてはいろいろ皆様から意見があります。美術館

を知らない人が多い、どこにあるか知らない人が多い。これは改善されましたか。まだですか。

【鉄矢会長】 データ・ザ・ビフォア。

【淀井委員】 C o C oバスの運転手さんの後ろに美術館の展覧会の案内が出ていて、宣伝効果はあると思います。工夫はしているんですね。

【鉄矢会長】 ええ。市外への宣伝はどうでしょう。日曜美術館にぺろっと出たり、ああいうのは、僕はすごく大事なことだと思っています。

【千村委員】 道を聞かれたことは何回もあります。近くに住んでいるから、市外から来た人に。だから、最寄りの例えばバスでここでおりとか、そういったものがないからとても、道に一応出ているんですけど、あれは気づかない。ちょっと足元のほうに張ってあったりするんですけどけれども、気づかないのか、よく聞かれましたね。やっぱりアクセスの仕方が。

C o C oバスだって何本もない。偶然C o C oバスに出会えばいいけど。他市から来て、C o C oバスが時間どおりに来るなんてことはできないし、私たちでも、C o C oバスは便利だなと思っても、時間的制約がすごく多いのであまり利用できないですね。

【淀井委員】 ないよりはいいですけど。

【千村委員】 出歩きたいのに。

【淀井委員】 そうです。きょうもこれで来ましたが。

【千村委員】 そこまで出るのが大変です、私なんか。

【鉄矢会長】 情報発信ツールが欲しい。いろいろ工夫していると思いますが、少ない、また人的力もなかなか難しいことですので、いろいろ工夫は継続しているんだと思いますけれども、我々委員のほうも、他のメディアを逆に上手に使ったりしながら、知っている新聞屋さんとか、知っている雑誌屋さんとかを使いながら、ぜひ良い広報を一緒になって協力していきましょう。

【大野学芸員】 さっき言った新聞に最近載ったものを回します。東京新聞と中日新聞、同じ記事が載っていました。中に割と大き目です。それです。こちらのこれです。

【鉄矢会長】 すごいですね。

【大野学芸員】 これは展覧会紹介ではなく、美術館紹介ということで。つい先週のものですけれども、少し増えて。

【神津学芸員】 はい。結構反響というか、それを見てお散歩コースに組み

込んでくださった方も多かったですね。

【淀井委員】 新聞記者の方とか、いろいろ知り合いがいないとだめですね。

【鉄矢会長】 すばらしく工夫しているのがよくわかりますね。

【淀井委員】 そうですね。

【鉄矢会長】 我々も協力しましょう。特に、今日のいろいろなものを見ていくと、これからも楽しそうなものがいっぱいあります。協力していくということで、ここについては終わり。

先ほどありましたボランティアの体制についてあります。学芸員からボランティアとの活動を模索したいということで、近隣の大学生とか中学生、小学生にワークショップしてもおもしろいとか言っていました。いろいろボランティアが今、もう1回、ちょっとボランティアの仕組みなり、イベントに対して、イベントごとで募集をかけてということなんです。募集がうちの近隣大学としては、やっていたり、それから、専門学校がございませぬ。工学院専門学校でしたか。それから、あと、慶應のほうも。

【大野学芸員】 武蔵美とか。

【鉄矢会長】 慶応大学から来たり、東大さんも今動いていますね。

【大野学芸員】 はい。

【鉄矢会長】 よそからは入ってきますけれども、ボランティアの組織化はしていない。ボランティアの組織化も、だから、丁寧にやっていきたいということです。

【大野学芸員】 私も組織化するための時間といいますか、作業が必要になりますので、学芸員もそれなりに、そのための時間、名簿の管理ですとか、いろいろ講習会みたいなものを準備したりですとか、それはそれで時間のかかることだと思います。

【淀井委員】 小学生とかで継続して来る子供というのはいるんでしょうね、ワークショップとかに。

【大野学芸員】 いますね。はい。リピーターの方は。

【淀井委員】 そういう子が中学生になって、今度少し指導者というか、小さい子を引っ張るようなことにもなっているんですか。

【大野学芸員】 まだそこまで。

【淀井委員】 時間がたっていない。

【大野学芸員】 はい。時間がたっていないので。

【千村委員】 今すごくはやっているんだけど、ある場所についてどれぐらい知っているかというのをテストみたいなのを。検定ですね。それとか、歴史的なことをどれぐらい知っているか。だから、はげの森美術館についての検定みたいなのをやって、何級とかやっておいて、そういう点数をとった人からボランティアみたいなのをするといいんじゃないかなと思うけれども、検定を受けるかなと思いますね。

【鉄矢会長】 漢検みたいな組織を作れば受けてくれます。地域検定をいろいろやっていますね。だから、そういうけんぼしゃん検定みたいなものがね。

【千村委員】 いいと思います。おもしろいと思いますよ。

【鉄矢会長】 何を中心に考えるのか。でも、先ほど言った長く来ている子が中学生ぐらいでその気になったら、またそれはおもしろいかも说不定です。

【千村委員】 私なんか、自慢じゃないけど、花の検定というのが始まったときに受けたら、2級に受かったんですよ。1級、2級というのがあって、1級の方はすぐに花のガイドとして10人ぐらい決まって採用可能だったんですけど。

【鉄矢会長】 どこに採用されるんですか、それは。

【千村委員】 それは農大で試験があったんですけども、でも、農大がやっているんじゃないんですけど、公園の花のガイドみたいなものに10人ぐらい1級になって採用しますというのがありましたから。

【鉄矢会長】 おもしろいですね。そういう検定で、その先を採用にまで結びつけないと、持っているけど、何の価値もないものは受けてくれないと思います。

【千村委員】 果たして受けに来るかどうかな。

【鉄矢会長】 けんぼしゃん検定3級だけれども。(笑) けんぼしゃん検定5級じゃだめだけど、2級とったけど、まだ上に100人くらい残っていると。ぜひボランティア体制は形というのをどういうふうにするのか。やっぱり小さな美術館の特殊性を生かしていくというのが必要かもしれないですし、少し3年間でパターンが出ているのかもしれないですね。活かしていただきたいと思います。

子供への対応。子供って、おもしろかったら、友達とまた来れるよという風になるとおもしろくなります。カードにスタンプを押したものに、美術

の先生を対象にしたツアー、これは図工の先生用ツアーというのが始まるということですね。

【大野学芸員】　そうです。ツアーという感じでもないんです。

【鉄矢会長】　一緒にやる。

【大野学芸員】　はい。

【鉄矢会長】　学校向けワークショップというか、学校も勧める。どうですか。ざっくばらんに、子供との関係をちょっと。さっき言った、毎回来る子とかいるんですか。

【神津学芸員】　先ほどの報告にあったコラージュワークショップに来て花を描くにどちらも参加の小学4年生の女の子もいますし、あと、この間の無料開放の日に、以前、私が学校に訪問した後にすぐ来てくれた小学生が2人この日は無料だというのがわかっていて、無料の日をねらって、朝一番にもう一度来てくれました。ちょっとずつですけれども、地域の子供たちの場所にもなりつつあるのかなという気はしています。

【鉄矢会長】　そういう小学生が来たときは出迎えるんですか。

【大野学芸員】　はい。ああと言われちゃいました。それこそ小さい美術館のいいところで、顔が見えるので、ああという感じで。

【神津学芸員】　まだ始まっていないというか、次からの演劇遊びのほうにも訪問したところの小学生がいて、去年、話もちょっとしました。

【淀井委員】　そんな話もありましたね。学芸員の努力が。

【神津学芸員】　何となく子供たちが自主的に美術館を気にしてくれているかなという気はします。

【鉄矢会長】　それはおもしろいですね。とてもうれしい話です。

【大野学芸員】　私はこの前、けんぼしゃんなり、コラージュなり、何なりで受け付けをされていて思ったんですけれども、小さな子の、4年生以下の方は保護者の方同伴というのもあるんですけれども、お母様が電話をしていらっしゃるときに、お母様仲間で聞いたというので、どこの子が行くから、うちの子もと、そういう感じのお母様のネットワークで子供が来ているような感じもします。

【神津学芸員】　あと、おもしろいのは、60代、70代ぐらいの方がお1人で来たときに、こういうワークショップをしているんだということを知って、またご来館くださったときには、ほんとうに小さな子と一緒に遊ぶよう

な形で美術と一緒に、コラージュですとか。その人はお一人なんですけれども、子供たちはみんな、おばあちゃんとおじいちゃんと遊んでいるような形で、まざって遊んでいたりと、すごくコミュニケーションをお客様同士がするようになってきているので、それもおもしろいなど。子供だけに特化するのもよくないかなと思います。

【淀井委員】　すごいですね。流れがいい。

【鉄矢会長】　それはすてきなレポートができそうだね。それを見ていると、日本中から見学者がいっぱい来ちゃうのかな。ありがとうございます。ぜひ工夫の継続をお願いしたいと思います。

地域連携に入ります。9ページ。20年度第1回ということで、江戸東京たてもの園まちおこし事業、この辺に関して今の工夫をどんなふうに進めているかを説明していただいたほうが、おにぎり屋さんとか、江戸野菜の会とかとワークショップをやったりしたのをちょっと記憶に残っているのだけでもざざっと地域連携をこんなふうに。振り返ってもいいです。

【大野学芸員】　昨年度やった江戸東京野菜で、エコバックを描こうというのが試みとしては地域連携の最初だと思うんですけども、その後のこともありましたし、江戸東京たてもの園の学芸員さんといろいろなお話をしたりとかはしているんですけども、具体的なことは進んでいないです。

【神津学芸員】　あとは、今年度の先ほどの絹代展ですけど、これも文化財センターと。

【大野学芸員】　小金井市の文化財センターと。

【神津学芸員】　はけを紹介するという視点もありますので、そういったことで、市の同じ施設、文化施設ということで、文化財センターさんともやりとりを始めています。

【大野学芸員】　文化財センターのほうは市制50周年を記念して、昔の小金井の風景ですとか、そういうものをまとめた記録を作られました。そういうものをお借りしたりですとか、あと、あちらも学芸員さんがいらして、同じ博物館相当の施設だということで、いろいろご相談させていただいております。例えば備品をお借りしたりとか、そういうのもしています。

【淀井委員】　大岡昇平がいま一つ、メインじゃないというか、少し小さいですね。(笑)

【神津学芸員】　一応田中絹代展です。

【淀井委員】 ちょっとその辺は文化的に残念な気がいたしますけど。

【鉄矢会長】 ご意見として承っておきます。

【大野学芸員】 今回もいろいろ考えたんですけど、美術館というのもあって、大岡昇平にすると、文学館でやる展覧会に近いものがあるんじゃないかということで、ビジュアル的なものがいろいろ準備できる映画女優さん、映画のほうにちょっと重点を置いていたんだと。

【淀井委員】 ごく一部で、少しは文学的な感覚が必要ではないでしょうか。

【鉄矢会長】 広い意味での美術館ですから。いずれ。

【淀井委員】 いいですね。やりましょう。

【大野学芸員】 あと、こちらで、鈴木係長のほうが地域連携のほうで、ここでもまとめていますけれども、そちらが少し進んでいるのか、このときよりは進展があったかと。

ここで、芸術文化振興計画のお話を係長、されていますけれども。

【鈴木文化推進係長】 このときもお話をさせていただいたんですが、小金井市で芸術文化振興計画というものを4月に施行いたしました。それも10年間の計画なんですが、最初の3年間で市民を主体として実施主体を作りたいということを考えておりました、その主体の中に、今、計画を作ったり、条例を作ったりするのは東京大学と共同研究という形で作ったんですが、それを推進していくのに、地域の大学ということで学芸大との連携ということを大切にしたいと思って、今少しずつそれを進め始めているところです。

進めるその主体のもとになるという、ちょっと回りくどいんですけども、実行委員会形式でやっていきたいと思っておりました、その中に学芸大の、それも先ほどの凝ったチラシのデザインも正木先生の研究室だったと思うんですけども、正木先生に実行委員になっていただいて、東京大学の小林先生と研究室と一緒に連携をしていきたい。大学だけではなくて、たてもの園ですとか、それから、繊維博物館、今、科学博物館ですか、それとか文化財センターとか、地域の文化関係施設と連携をしながら、地域の芸術・文化団体とも連携しながらやっていきたいと考えています。

ボランティアのお話が先ほど出ていましたけれども、美術館だけのボランティアを組織するというのはとても難しいものがあると思うんですけども、この計画を推進していくときに、ボランティアの組織をしたいということで、6月1日号の市報でボランティアの募集をすることになっています。

それには一定、皆さんにどういうものなのか。ただ集まってきて、何かお手伝いをしてというのではなくて、どういう性格のものなのかということをご理解いただいた上でボランティア活動に入っていただくということを考えていますので、例えば美術館のこういうことをやりたいというような登録をしていただいて、美術館の要請に応じるというか、協力できるところはしていくというような形もこれからは考えられるかなとは考えています。そんなところです。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。優秀な人がこれだけの工夫をいろいろやっているのは、私は敬服いたしますけれども、でも、まだまだ工夫はいっぱいするところはあるし、必ず見つかるのだと思いますので、続けて楽しく工夫をしていただければと。つらい工夫はしなくて、楽しい事を進めていくことがいいだろうと。

続いて、すいません、学芸員受け入れについて、展示の閉館期間についてということ、2点続けてお願いします。

【薩摩顧問】 まず、展示の閉館のことですけれども、これは3年間やっていて、絶対にこういう期間は必要であるということがほんとうに結論として出てきました。私も東京都の現代美術館を作り、芸大美術館を作り、やってきますので、公務員的な発想から言うならば、当然こういう生涯学習の機会になるのでしょうか、こういう公共施設というのは、本来ならば週に1日閉館ぐらいで、あとは年末年始の閉館ぐらいで、恒常的に開放されているというのが一つの考え方なのかもしれません。けれども、まず、美術館というところはほかの例えば体育館とか、公民館とか、プールとか、あるいは図書館とか、そういうところとは全く違った性質のものです。ほかのところは基本的には施設をしっかりと維持していれば、あとは体育館なり、プールなり、公民館なりを使う人が来てくれる。それから、図書館だって本をきちんと管理していれば、あとは人がやってくる。しかし、美術館というところは、こちら側で作品の調査をし、研究をし、あるいは企画を立ち上げ、考え、打って出ていかなければならないところですので、全く違うんですね。

だから、よく図書館司書と学芸員が同じように考えられるようなことがありますけれども、それは全く違うわけで、図書館司書というのは日本全国というか、あるいは世界的にある程度決まった本の管理の仕方、ノウハウに従って仕事をしていけばいい。ですから、極論を言えば、例えば北海道の司書

だった人が鹿児島図書館に行っても、すぐ仕事はできるわけです。

ところが、美術館の学芸員というのは、そのコレクションとの関係もありますし、地域との関係もありますし、北海道の美術館にいた人がいきなりこのはけの森に来たって、使えるようになるにはまた二年、三年かかるわけです。そういうところなんです。それがまず大前提としてあります。このようなほんとうに小さな美術館で例えば作品の整理をしようと思ったら、あの展示室を使わなければできない。それから、次の展覧会を仕込もうと思ったら、どうしても前の展覧会と次の展覧会の間に、その展覧会を壊して会場を整理して、また展示室をあけなければならないので、どうやったら、これは閉館になるのです。展示室が複数あれば転がせませすけれども。

それから、ワークショップによっては展示室を全部使わなければできないワークショップもあるということで、これはもうこの美術館のやり方というのは開館、閉館をメリハリをつけていくしかありません。また、それでいいと思います。特にコレクション展みたいなのは、多分2か月やっても、3か月やっても同じ内容だったら、来る人数は同じです。これは3か月やれば、2か月の1.5倍来るとは到底考えられないのです。だから、広報さえきちんとやっておけば、むしろメリハリをつけたほうが逆に展示が変わったんだな、次の展覧会になったんだなということがわかりますので、この方法はやらざるを得ないだろうと思います。

そして、そういう中で、学芸員実習に関しては多分いろいろと要望が出てくるとも思いますし、美術館がほんとうに小さくても一流であるということになるためには、このくらいのことはできる力量を学芸員側が持っていないと困るということです。もちろん私も協力しますが、これはそろそろ考えていくべきで、これは多分、美術館のスケジュールとかかわってくると思います。多分ここがやるとしたら、あらかじめスケジュールがある程度決まっていればの話ですけれども、閉館中の途中ぐらいから来てもらって、仮に実習が2週間ぐらいあるとしたら。展示室での点検の仕方などをかつちりと教えるとか、あるいはワークショップに参加してもらおうということをやしながら、次の展覧会の準備をやって、その展覧会の準備を、最終段階のものが刷り上がってきたとか、展示して初日を迎える。そのくらいまでを体験してもらおうようなプログラムを組めば、何かできると思います。

そうではなくて、完全に開館中に行うとなると、またハードの問題です。

これは実習に5人も来たら、その5人がどこにいるんだ。どこに座るんだという話にまでなりますので。そろそろ美術館がまず自力をつけて、その自力を社会還元していく。そして、また、そのことによってこちらもまたスキルアップするために、そろそろ学芸員実習というものを考えていかなければならないことだろうと思います。

今、我々が考えているのは大体そういうことです。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。それに対して今、ご質問等何か。

【淀井委員】 そこまで育ってきたという感じで。

【鉄矢会長】 今の実習だったら行けないですね。入れそうだけれども、なかなか本物の展示のスタートに立ち会えるなんていうのは小さな美術館だからできると思うんですね。

【淀井委員】 邪魔かもしれませんね。

【薩摩学芸顧問】 いや。そんなにあちこちとらなければ、その気になれば、当然私も。展示室が空ならば、そこで基本的には全部の展示ができますよ。ちょっと彫刻は無理かもしれないですが、絵画と、いざとなったら、私が芸大でずっとやっている古美術系のもの一式全部持ってきますから。

【淀井委員】 頼もしいですね。

【薩摩学芸顧問】 掛け軸から、巻物から茶道具から、その辺は全部やろうと思えばできます。今の学芸員は、茶道具を扱える学芸員は非常に少ないですから。

【淀井委員】 粗相があるとちょっと心配ですね。

【薩摩学芸顧問】 お茶を習いに行くと高い月謝払って、3年ぐらいかからなければ習えないことを1カ月でばっと教えますから。だから、そういうことも含めれば……。

【淀井委員】 来ますから。

【薩摩学芸顧問】 ここでもうそろそろ我々3人でかなりできると思います。もちろん鉄矢先生にも協力してもらって。

【鉄矢会長】 覚えているかな。習った先生の前でそんな覚えていないと言えない。

10ページ最後のところで、すいません。では、今お話ししたようなところは継続して続けていただきたいということでよろしいですね。

最後の市民参加についての考え方ということで、市民参加について少し、

市民参加とは何か、市民がここで作品を展示する市民ギャラリーなどではないと提言にある。そこは大事だと思う。市民ギャラリーのように理解されることは早い段階から危惧されていた。これ、出だしのほうです。でも、結局、今、市民ギャラリーのようにはなっておりません。これはスタッフの皆さんの努力、いろいろな質問が多分あったんでしょう。全部上手に振り分けていただいて、市民ギャラリーのようなリクエストも多分あったと聞いています。それを全部しっかり断って、こういうことができている。多分、休館のときには使えないのかとか、いろいろな話は出てきたんだろうと予想はできるんですけども、今はこういう形になっています。

【薩摩学芸顧問】 これは提言の最初、委員会の段階から、かなり何人もの委員が強調されていたことです。閉館中というのは、さぼって何もやっていないわけではなくて、展覧会というのは、我々の中でいうと、ばらしと仕込みが大変なわけで、休館中のほうが忙しいわけです。その間、ギャラリーがあいているとか、そういうことは全くないということと、もう1つ、展示室が例えば2つあって、片方は市民ギャラリーとして年間開放するというのならはまだできるんですけども、これを混在させると一体どれが美術館の学芸員がきちんと企画したもので、どれが持ち込みのものでというのは市民の方から見えなくなってくるということ。

それから、淀井委員もいらっしゃいますけれども、例えばいろいろな作家から申し込みがあった場合に、市立美術館としてある程度のレベルは保たなければなりませんから、当然、あなたはいいい、あなたはちゃんとした作家でちゃんとした作品を作っているからいい。だけど、あなたのは幾ら何でも展示できませんという判断をどこかで、学芸員がするのか、この委員会がやるのか、やらなければならないんです。ただし、その判断をやって、それをおとなしく受け入れてくれるかどうか。何であいつのはよくて、おれのはだめなんだということが出てきて、またそういう人に限って、例えばそれこそ議員に泣きつかれて、そっちからまた館長に圧力がかったなど、大変なことになるのです。これは絶対にやらないほうがいいと思うということです。

それから、自分のコレクションを展示したいというような方もいましたけれども、もちろん出品料は要りませんという話もありましたけど、出品料は要らないと言ったって、ここであなたのコレクションを展示するということは結局、自分のコレクションを市民の税金を使って展示しているわけです。そ

れはよほどいいものであるならば、そのときにはまたいろいろ考えますけれども、基本的には、自分のコレクションを人に見せたいんだったら、自分でお金を出してどこかのギャラリーを借りて展示してくださいというスタンスをスタッフはとらないと、今の段階では混乱いくだろうということです。

作家とは、まず大体だれの何をもって作家というか。そこからまず問題があって、非常に優秀な作家はたくさんいらっしゃいますけれども、そうでない自称作家という、とてもあなたの作品はお金を払って見せられるものではないという人たちもいますので、その辺のことで、これはとりあえずバリアを張っていかなければならない部分だというのは、この美術館を作る委員会の中からのずっと継続した見解にはなっております。ほんとうに淀井先生とか、若林先生みたいな作家ばかりだったら全然問題ないですけど。

そういう作家ばかりなら全然問題ないですけども、そうでないのが時々ありますので。

【鉄矢会長】 ぜひ市民参加という形がどういう形の市民参加という、多分市民参加とは何かと淀井先生がおっしゃったのは、多分出だしの提言の中に書いてあるんです。文言のところだと思うんです。提言の中に市民参加というのがあったので、今はボランティアで、ボランティアを呼んで、通学している市民、そういうのがかかわってきたりやっているのも市民参加と理解していれば、運営とか、そういう支援に市民が参加しているし、あとは、実際やっているワークショップなんかにはほんとうに参加しているのを、広く見ても、狭く見ても両方できていると。ただ、これをどんどん広げていく格好を、提言をもう1回見直しながら考えていくことも、時々チェックしなきゃいけない。でも、市民ギャラリーではないというのはもう既に3年間の実績で。

20年度、下、20年の3回のところであるのがここが多分ポリシーという、美術館としてのポリシーという表現だったり、美術館の筋からという表現が天野さんのほうかも、私のほうからも出ています。これは多分基本計画というところだと思うんです。基本計画があれば、この美術館としてのポリシーはこうですからというのは基本計画に出ている。美術館の筋から外れていないですよというのは、そういうのが出てくるべきだと思うんです。そこが何となく、しゃべっていてあいまいなのがこういう指摘になったと思います。

すいません。私の議事がちょっとまずかったところがありまして、ちょっと戻ってください。

5 ページです。5 ページに戻っていただいて、運営協議会の委員構成についてだったんですけど、トピックとして上がっていなかったんですけども、真ん中の薩摩先生からの意見の中で、収集評価委員会に学芸員が入っているというのも実はここに話があって、これは見たら収集評価委員という中には市の職員が入るということだったので、今は学芸員が入っていない。そういう形で、ここは学芸員が入って、昔は解決したということになっておりますので、すいません。そこは一つ、私は抜かして話を進めてしまいました。

すいません。早口で申しわけなかったです。

以上が継続検討事項についてというところを振り返って、運営協議会として再確認して、もう一度、この議事録をまとめて美術館にお渡しして、美術館が市のほうにどういうタイミングなのか。それは戦略もあるでしょうから、お任せしますけれども、こういうことをご理解いただきたいと思います。

5 番目にその他というのが書いてあるんですけども、その他何かありましたら。

【淀井委員】 すいません。私は送っていただいた資料を読んで、結局、100円とか200円という話がたくさん出ていましたね、何ページにも。あれはどうなっていますか。どういうところに落ちついたのか。

【大野学芸員】 一筆箋のことでしょうか。実際でき上がりまして、こちらなんですけど、200円ということに落ちつきまして、200円で販売しております。

【淀井委員】 200円、安いですね。

【大野学芸員】 はい。非常に人気で。

【鉄矢会長】 これは美術館好きの人は買いそうですね。

【大野学芸員】 今後も美術館のそういう複製の製品に関しては市の一般の印刷物とは違う扱いでやるということで結論がでております。

【天野事務担当】 そのついでにちょっとご報告申し上げますと、一筆箋を複製して販売するのであって、その価格を設定するということで、美術館としては近隣との関係で調査した結果、一番安いという部分で200円という価格を設定したんですけど、今回ちょっと初めてだということで、量を1,500で2種類で3,000部作ったんです。結果として、1冊当たり約140

円ぐらいの単価だったんです。それは、私ども有償頒布、いわゆる市が発行するとか、市が頒布する有償頒布物の価格設定の委員会がありまして、そこに提案をしてくれという指導があったものですから、提案をしたら、有償発行物は市民に安く売らなければいけない。そのために、140円ぐらいのものを200円で売るのはまずいんじゃないかということをお問われたんです。それを委員会のときにちょっとご相談をして、その後に、私が委員会に館長と出まして、説明した中で、委員の中からはいろいろな意見をいただきました。一応私どもとすると、美術館としてはこういうふうを考えているということで、いわゆる芸術作品の模写とか、それを利用しているもので、一般の文房具屋さん等で売っている汎用の一般の一筆箋と違うんだよ。芸術作品の模写とか、そういうものを使っているのだから、価値だとか、そういうものを学芸員のほうで理由書を作り説明しました。その結果、委員のほうから、全体ではないんですけれども、一部の委員から、今回の有償頒布物の委員会にはなじまないということで、差し戻しを食いました。その結果、私どもも部長の判断でということの指導を受けたものですから、改めて部長に報告起案をして、200円でいくという決定をして、今200円で頒布しております。

余談かもしれませんが、部長からもっと高く売ればいいのかというような意見はありました。たまたま近隣が200円というところがあって、それに合わせたということです。高いところだと600円とか、700円とか、そういうところがあるんです。非常に好評です。

【淀井委員】 好評ですか。よかったですね。

【鉄矢会長】 今回、報告の中には、前々回まで一応こういう頒布物だとか、そういうものも全部、報告していたんですけれども、ちょっと煩雑になるので、入館者数だけにしようということなものですから、データとしては毎日とっています。

【淀井委員】 著作権はどうなっているんですかね。夫人には。

【大野学芸員】 ご報告して了解をいただいて、デザインの段階でもお見せして、問題ないということです。

【淀井委員】 何も、書いていなくていいんですか。

【大野学芸員】 ぜひお使いください。これは美術館のほうで売っておりますので。

【鉄矢会長】 ぜひお使いください。ありがとうございました。皆様のご協力で……。

【鈴木文化推進係長】 済みません。時間が迫った中で。皆様のご意見を簡単にお聞かせいただきたいんですが、実は企画展のときにいつも内覧会をやっています。その後に、レセプションということで、美術館では恒例なことだと思っんですけれども、それをちょっと質問なども出たりというようなことがずっと開館以来行われていて、小金井市としては、美術館を初めて持って、そういうことが美術館で行われているということを知らない職員も市民もいます。知っている方いらっしゃると思います。職員とか、知らない中でそういうことが行われているというので、今、どこの行政でも、行政の関係の事業の中でどんどん縮小している方向があるときに、美術館はそういうことを続けてやっていることをどうなんだろうという声がちょっと聞こえてきたりして、それから、今度の部長も新しい部長で、そういうことが行われているのを知らないで、あれはどういう位置づけなのということもあったりして、美術館の企画展のときのレセプション、ああいうことがなぜ必要なのか。どういう位置づけで行われているものなのかを皆様のご意見をちょっとお聞きしたいということがありましたので、ちょっとご意見をいただければと思っんですが、やめなきゃいけないとか、やめたいとか、そういうことではなくて、なぜ必要なのか。どういう意味合いで行われているものなのか。私どものほうで、前にもこういうことでちょっと話が出たことがあって、近隣の公立の美術館で府中と八王子と吉祥寺にお聞きしたんです。府中と八王子の場合は同じ建物の中に喫茶室があるので、そこに内覧会が終わったら、そこにコーヒー券か何かをお渡しして、そちらで飲んでいただくようにして、吉祥寺のほうは一切やっていないということがあったので、じゃ、小金井はどうするのか、どういう位置づけにするのかをちょっとうちのほうでまとめておきたいとか、そういうことがありましたので、皆様のご意見をお聞かせいただきたいと思っんですが。

【淀井委員】 それをここで聞いているのですか。

【鉄矢会長】 はい。僕から言ったほうがいいですか。どういう意味があるのか。私はあまり気にしていないとか、遠くから来ていただいた方にちょっとお口をぬらしていただく程度のもので、大宴会しているわけではなく、すいません、遠くから来ていただいてという程度で、ほんとうちょっと

お話が聞きたいときに、コミュニケーションのネタとして、どうも来ていただいてありがとうございますと名刺を差し出すよりは、ちょっと飲み物を差し出すほうが和やかに話が聞けるというのと、あといろいろな情報交換ができるというのでレセプションというのは必要だと思っているほうです。

もう一方で、あとは慣例でもあると思っているところがあって、この間も国立近代美術館で青木茂さん、建築家の方のドローイングか何かの展覧会をやったときに、スイスの建築家の方も一緒にやって、そのときは大層おいしいチーズが出てきたんです、スイスチーズが。でも、それはスイス大使館からの提供だとか言ってやっていましたし、場合によっては、ワインでなくてもいいし、黄金の水でもいい。それは何でもいいと思います。それに応じて、時代の要請に応じてでもいいと思っています。ただ、今までは普通にあったのと、もともと中村研一のご家族の方もいて、招いている感じもあるというのがすごくあのときに、僕がレセプションに行っても思ったので、夫人のうれしそうな姿を見るとそういう雰囲気がいいんじゃないかと思います。

【鈴木文化推進係長】　ちなみに、小金井の場合には、食べ物とか飲み物は予算公費ではなくて、差し入れというか、それで賄わせていただいているので、税金を使っているわけではないです。ほかのところは、例えば府中だとか、八王子は公費でもおもてなしをしているということでした。

【淀井委員】　差し入れというのはどういうことなんですか。

【鈴木文化推進係長】　お祝い金をいただいて。お二階からお祝い金。あとは現物で、先生方から、関連の方から飲み物などをいただいたりというような。

【淀井委員】　初日に何かちょっと、それこそ小金井のおいしい水でも、お茶でもいいですけども、コーヒーでもいいんですけど、食べ物をそんなに出す必要はないと思うんですけど、私は個人的には。

【薩摩学芸顧問】　多分これはほんとうに突っ込んでいくと、千差万別になると思うんです。館によっても違うでしょうし、いろいろなところがあると思うんですけども、そういうことをやっているところは、美術館とか、あるいはコンサートホールとか、あるいはましてやオペラハウスみたいなところはある程度交流の場だという意識があって、交流していくときに、何か飲み物ぐらい、ドリンクぐらいはという感覚はあるんだと思います。

それから、ここではそういうことはあまりないかとは思いますが、

大規模な国際展みたいなものをやったりすると、これは大使館が絡んできますので、向こうから来賓が来たとかということになると、これはもう作品をお借りしている以上、何らかのことは、まさに遠路はるばるフランスからどうもという話になってくるんですね。ですから、コレクション展みたいなものでやる必要はないし、だから、これは展覧会によって違ってくると思います。例えば今度、浜松から大量に借りて、向こうからも学芸員が来て仕事をしてということになって、それでめでたくオープニングを迎えたということになると、若干のものはあってもいいのかなという気はいたします。ただ、先ほどから申しているように、こういう小金井市立の小さな美術館ですので、いわゆる大宴会をする必要はないので、基本的にはドリンクサービスで、それが水になるのか、お茶になるのか、ビールになるのか、ワインになるのかといったら、そのときのこともあるでしょうし、ドリンクに若干の乾き物ぐらいという程度のもので、かつ公費は使わない。税金は決して使わない。芸大美術館でもよくレセプションをやりますけれども、それもいわゆる大学の予算は一切使っておりません。大体よく頼むのがビール会社に寄附してもらっています。そのかわり、そのビール会社のビールを飲むことが条件です。

【淀井委員】 ありますね、近くにビール会社が。

【薩摩学芸顧問】 ええ。意外に、こういうところはよく。お酒の会社は結構もうかっているところがありまして。

【淀井委員】 社会還元ね。

【薩摩学芸顧問】 そう。社会還元を向こうもしたくてしようがないところがありますので、そういうところで。だから、税金を使わずに、あとはその場その場での考え方。ただ、基本的にはドリンクサービスぐらいが中心で。ただ、この場合には今、鉄矢先生が言われましたけれども、もともと私立美術館としてきていまして、関係者の方の気持ちもあるんだと思うんです。特に中村研一の展覧会みたいなものだと当然いろいろと親しい方もいらっしゃるでしょうし、年に何回かの非常にうれしい晴れの間ということ、寄附があったりということもありますので、その辺をいろいろとかがみながら決めていくということになるんじゃないかと思います。

【淀井委員】 主催者側にすると、展覧会をしてもらった、作家本人が来てくださったとき、何もやらないわけには。気を使いますね。その場に依じて。

【薩摩学芸顧問】 ええ。その場で考えるぐらいだと思います。

【鈴木文化推進係長】 ありがとうございます。

【鉄矢会長】 では、その他、ほかにご意見ありますでしょうか。

では、平成21年度第1回小金井市はけの森美術館運営協議会を閉会したいと思います。ありがとうございます。

議事録修正のある方は議事録を修正してください。

【大野学芸員】 すいません。あとお知らせですけれども、先ほど新聞のときにお伝えすればよかったんですが、JRのトレインチャンネル「東京ぷらぷら散歩」というのがありまして、山手線の電車の中に最近ある小さな画面で、下のほうに日程がありますけれども、小金井編というのがあるそうなんです。

【淀井委員】 いいですね。

【大野学芸員】 1か2かどちらかまだわからないんですが、どちらかで美術館の紹介をするということで取材がありました。ちょっと短い期間なんですけれども、ちょうど田中絹代展に重なった時期に、中央線でなくて山手線なんですけれども、こういうものも最近取材が。こちらから売り込んだわけではなくて、どこかで拾ってきてくださる。東京新聞もそうなんですけれども。

【淀井委員】 ご案内はいつも送っているんですか。

【神津学芸員】 はい。常にプレス等のご案内は出しているんですけれども。

【淀井委員】 この地道な活動が結果として出てきたんだと思う。

【神津学芸員】 プレスプレビューの場所というのも内覧会になるんですね。

【淀井委員】 皆さんが頑張っている効果が出てきましたね。

【大野学芸員】 プレスの方も結構多くて、ホームページを見て情報を拾っているところも多いようで、今、足で動くのではなく、ネットでほとんどの方は調べられますので、そう考えるとホームページを充実させなきゃ今は。

【淀井委員】 この1年前より変わったんじゃないですか、勢いが。山手線に乗ってみたいですね。

【大野学芸員】 7月、どちらかになると思うんです。1か2かどちらかなんです。JRは商業うまいですね。武蔵小金井はおそらく北と南で分けるんじゃないかと聞いているんですけれども、しかも3分ぐらいの短いところの

中の美術館紹介です。

【宮村委員】 みんな、あれ見えていますよ。

【淀井委員】 ほんとうにいろいろなことをやっていただきたいですね。

—— 了 ——